増補

江戸名所記

五/上

特別
ル4
3698
5

門 九 4
號 3698
卷 5

增補江戸砂第六卷目録

第一　浅草乃観麗堂
第二　同大六天
第三　同西福寺
第四　同文殊院　今ハ岩清水ト
第五　同弱弘堂
第六　浅草寺観音
第七　明王院乃姫ヶ池
第八　今戸山附吉原山乃事
第九　穂泉寺附鶯亀山
第十　角田川木母寺
第十一　牛御前

早稲田大學圖書館
第25.4.12
購入

第十二　業平天神
第十三　法恩寺
第十四　東本願寺
第十五　三十三間堂附矢数の事
第十六　神田山幡隨院
第十七　大雄山海禪寺
第十八　江の小山清水寺
第十九　吳山寺附法擅林
第二十　東光院乃業師
第廿一　目黒寺附一遍上人
第廿二　指臺寺

第一　三間麿堂

りふ文清水寺ときこえて。篇堂門ともあへり。行程に清水寺ゆくつゝらゝ門とあるとばかや所。二所にぐこえて。凡町やたの分に十王堂。そのこ。二尺三尺あるひしくあるとへど。又三間麿堂。寶殿。佛像ありあく。中ゐるハ三間麿大王。左ミ地蔵菩薩。右ハ三金剛乃老婆あやしたり。堂乃たゝふ不動堂。ときこえれハ。山間麿大王と申。八人ゐて五七日の影罪をたゝこゝろ。浄玻璃乃鏡。擅次幡。ゆ山宮にて。俱生神。司命司録神。同寶ふ。ふくく。元生の罪乃報堂とうんぐらう。地蔵ハ。三間麿王の中地。地の大也ハ。東和端數のねとあり。寶化の大意ハ。忠恩。清風乃うゝちとあるう。中道乃方便

ゆゑ。ハ。[illegible]生利益の善巧也。姫ハ又兒あの山乃麓。三途川乃わたり。衣紋樹乃もとに居ゐ。罪人を衣をとらせ。木の枝にかけ。[illegible]。閻魔王の妹也。奪衣婆と名付る也。絶ふとうもとこうもとも。[illegible]。罪業ふかきもの。変に成て。[illegible]。鬼の心あるものとあり。又十王とゝ。ハ。[illegible]十三仏の変化として。十大王のもとに。[illegible]者とうけとりて罪科の[illegible]。十王ハ秦廣王。初江王。宗帝王。五官王。閻魔王。変成王。泰山王。平等王。都市王。轉輪王也。十三仏と云ハ。不動。釈迦。文殊。普賢。地蔵。弥勒。薬師。観音。勢至。阿弥陀。阿閦。大日。虚空蔵也

[illegible]。[illegible]。[illegible]。日蓮宗ハ。[illegible]

三途川の姥。[illegible]。人乃物をとれ。罪[illegible]。[illegible]。

第二

大六天

そもそもあく。天王町。片町。[illegible]町と通る。森田町に行ハ。変に大六天乃社。[illegible]。ハ開基。[illegible]。ハ百余年に成。[illegible]。古老の云つたへ。[illegible]。[illegible]。[illegible]

守り給ふ大元明王と申奉る
大八幡地蔵の車れいぞう大六年ごろまでの三面
第三
西福寺
そこをもうく。猿楽町の。西福寺へまつらう。寺は
東照権現様。後府の四天王
心蓮社貞誉上人。頼故を。四海後の信として。完基
しゅの寺。四方の中。そるハ安阿弥乃四作。孫僧数の
ふつうつくりて。今山門よりとう海を
也。毎夕天とうく。法寺。寺の建物。庫
黄の材。瑞乃彫。頭ふまげ
りの奥をとりよりて
第の雲たなびくとう海。秋風ふ海。月光

第四　文殊院

それより文殊院へまゐりて山寺へ入る。
方丈にまうる。庭前に元禄年の
ひさうの桜の花ハ水とともに散ぬ。
あとにのこりし花ハ雨にくだけ
ちりてはなびらとなりて
ながれ行ぬ。
法乃滝のたきつ瀬ハ
いとゝ
水まさる

第五　弱彩堂

寂光院ハ小倉山の麓にあり。
乃社をゆ
つくしう。寂ハ後鳥羽門院
ゆうぎうとのゝ
とゝ。
弱彩堂
弱彩町の
寂光堂

くんかんへゆうぎうとのゝ
ゆくすゑのこと
ゆくすゑのこと
ゆくすゑのこと

第六

清水寺の觀世音

板橋より本堂へ四〇ゞ。右の方ふ枝あり。それゞより町。山乃
宿。翠天町とけゞくゝて。もくゝ人ハ奥州とへ乃海道ゆく。千
寿へけゞくゝ。あ面道筋也。ゆ。ゆくゝて。本堂ハ方へゆく
猪ゝ。並木乃茶屋町。とゝ。雷門へけゞくゝ。茶のたゝ右ゝ
廣小路也。板つゝ。ゆくゝ。ゆくゝ。一町余右ふ方。合十三
ケ所ゝて。猪ゝ。二まつゝよつゝゝ。ゆくゝ入て。右ふ猪ゝる。と
つゝ。右ふ方ゝ。の場ゝ。又ひゞゝに山王の社。梅ゝ。
ゝ。ゝ。右ゝ。猪ゝ。猪ゝ。茶ゝ。ゝ。ゝ。
て。ゝ。ゝ。ゝ。南ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

笑ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
傷ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

あくつのごとくひ屋をそなへて。ら[illegible]てつるを素つぎけもバ
そもとうるとふてこたるものぞとうるよ[illegible]てぞあるとあるくるゆ
といろうかゝ爲をくくもあるあ事ゆゆやゆゆぎとハりゆ
羅浮氏の携まとゝろ。神社考ゆゆ。結馬乃神の事
ちゝられゝう。山陰馬のきどゝくにおゝゝら。結び背ものとゝろう
柳は觀世音の縁起をとゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
をゝ。爲ゝ川ゝとゝて。漢父のあつゝゝゝゝゝ推古天皇
乃四宮ゝ。進中居と云人ゝ。ゆあゝゝ事ゝゝゝゝゝ

浅草寺

今にいたりて尼僧三人と。二百の護法と。堂又十人の僧
ありと。十社権現といひたてまつる。神社を造り。一百
支度を造。一乃権現と申奉る
○孝徳天皇。大化元年に。勝海上人出現あらせて。寺創し
給ふ。海一くうとうけたまはる。
○朱雀院御宇。天慶八年に。安房寺平公雅は観音
に祈りて。百部の経を海底し。龍の身ふるひて。官位をく
しうで。ひとりあびふ仏の中堂を奉奥。
仏堂を造。海底を作る。流方をたらる。又中堂の塔を作
一所乃島陸を繋てをく一橋ふうけしく。
ひとりて。中人を明乃祈りを
海底海堂の利生をくだす事。境ふ事を給ふ

ごとく。そもそもこれ地震あるひは地震。あるひは火乃難。
塔破塔ども。再興度ども。海底海中乃
神田をとりもてる。平後号利乃号民公。又寺領を寄られ
ける。そもそも那古の村乃軍。新田義貞公。ちくさを
捨現様を初たまふ。代しの武
仏像あくまで

第七

明王院乃姫が池

観世音ぞくのごとく

中堂とりもの方乃門。
中に明王院と云。
人家をもあく。人乃やどりなるなり。
多よりの。実に神中ふひとの乃巣の屋

あのうら姫の門のうら姫とおもひ
し。石の柱とあるを門けるとき
うらてごきあるく。家内を見て
流を救九百九十九人にのぼり。今一人ゆくゆくは人ゆゑぬ
清水の観世音。第五の人に門
せ給ふ。その第の者をたすけ
給ふ。

同八月十五夜の月の明
山第の者。ひとりの旅人宿
あるきまの宿すして。寒ふ
とてあ。彼石の柱とあるく
彼第のひかりぎ。ひとり
やどりん。柱とあるく

とのぐくうとびとびとなりて。やとうてうひろに
さよあけてあるのうぐ。あのびのてとをゆどのとへ
おくしりをおそろけも。旅人きをりかくと命を
とうてそもとうあにまりくあけゆきしがまぐ
ゆうけもバひとりの者ふて和をあるくて。ゆ海ど行ん
られど。夏中に者ふとうて。旅人見山第の観音
法者にてゆんと信ぐうあよかく。若の第を
ともとうしゆいゆく信じとてできけやたうせるふ
旅人義さあるに。ひてゆんかんぐうにゆけこをかぐる
も。そ清舎明天皇乃門宿。ふすもちふ。ふゆんせあんち
彼姫ぐあくぐやうにとうてぢくにおちんゆをふびんふ
ありゆ。ひとりのちごとゆ。ぐうもとに宿ふ

姫ぎみちごのちやうぞくれひぢあさとろんて家とうちうして
くるさとうんと思ひ。ときにいろうとてあり。けり。彼をぬがむとめ
ひ見のゆゝに角こくくくくあうとそこに心をとひて彼ちごの
かけ。あへ。ぬびへくくちやげくろうぐくかくくふ。ちゝで。お児
とろうさんとあるひ。例のこと。とくとおゝ。ゝ。児ちとくとくん
ちんの化身あるとバづくくからせ。ひうんひもめハうんぐんとめ
てくくくうぐさちちゝ。ゝくくくく

観音のうしへ[illegible]あく。金剛山へ行ぶしゆしゆ。金剛
山のことを紀州の高野山とかやうに[illegible]
山号も同名也。実に霊天宮[illegible]社へ[illegible]紀州
又更[illegible]あのうへにと[illegible]
乃大うんとこ[illegible]。[illegible]
京の[illegible]。牛[illegible]新田[illegible]
[illegible]。武蔵国の名所也。紀州[illegible]
同名のこと也。新勅撰[illegible]
高野山[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]。又[illegible]
[illegible]。紀州のうちの山のうち

いにしへ高野山の[illegible]紀州くもゐにかすみかゝりし
とよまれし紀州の高野山とかやうとやさてこそ家もの
禁乃ゆもゆんどうぶつ中にうもとゐきくれ物也。山のうへ
ちかのゆもうまれうもでこ[illegible]山やんぐうハ[illegible]
みくまびさもどもひ[illegible]乃くやうふうた。金剛山で同
道ふ。もどりぐひとでうもやんぐうこうふうもう。紀
こうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこ
とゐうハひとし[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]

山ゑゆく約金で問乃まぐさとゆくぐーと。ぎの乃ぶ方み
乃ぐ〜る多とぷふとゝゝて
金剛山で問乃せんと約束ぷまとまつちれぷをきこれ

第九

櫻泉寺并妙義山

そもゝとゝをゆくゆくて石濱村乃。櫻泉寺よりふつゝこちら。富寺へ
宗和尚の囲碁として。正法眼蔵の妙理とまり。宗和
言和の心中をひゝく。ゆとの一路みへ。まわ宗有の手と掛ひ
言下乃一喝みへ。天子乃魔羅と魔乃。業乃
業みへ。一千一百の則とゝゝて。以心傳心と。唐禅の姿
もとまのとゝとゝへ。釋三蓋四のゑゆけとゆく。文字試みを
ゝゝゆとゝう。寺門ふふ乃業みへ乃石塔并軍配団ゝ迄
妙義山へ。櫻泉寺と去事をきゝび。宴ゝ。源義経と云て

遊女の名なれば、さもとどめ、家紋なれば、
ぬし、梅ヶ枝の母のはなれ、梅ヶ枝、
乃里の遊女、花よとうたわれ、吉田乃ぶれにおれ、みれば、
分とこそ、あれ、梅ヶ枝と、いう。梅ヶ枝、
と、ほめ、ものし、家人、ひ、花よ、花よ、
里の、人へ、おろう、ぶれよめ、ぶれと、
かれの、書、ぬ、梅ヶ枝、とう、
ものよ、かれに、とう、とい、
とう、ぶれ、梅ヶ枝、ふ、
角田川、とて、梅ヶ枝、の、
今、や、一、ひ、
ふと、ぶれ、高人、

くあり、ぶれよ、今、ぶれ、時、我、
いと、の、ぶ、ぶれ、
ぶん、の、ぶ、ぶれ、
嫁、ぶ、ぶ、
ぶれ、月、
月、角田川、ぶ、
あ、ぶ、
梅ヶ枝、の、ぶ、
うと、ぶ、ぶ、
ぶ、ぶ、
ぶ、ぶ、
梅ヶ枝、ぶ、

屋つきてゝ。ゆきまろみたる。ほとゝぎすのこゑ。
あれはてゝとさゝのぞきたる。ゆかしけれ。
花のもとゞ。池にうかべて。
こゝに。四月ばかりにぞ。
ものゝ。おもしろきこゝろのども。
うあげ。ものどもやこゝとこゝ。
雲とゝて。ぬ。亀雲とゝ。
紙人ふちゞ。ぬ。ぬ。
池ぬ。ぬ。

第十

蘭田川乃春毋寺

ぬ。ぬ。ぬ。

ちと聞くと聞くて。涙ハ白くぬぐいもとうつて紅なるあく、義よへ
何ふ蛤を佛ふとうとや。梅ふるとあどうてかゝ。梅若れ
の墓とぞうつれ柳。むつ梅ちうもてく。又別の墓と梅を
ぬこ月十四日ハ彼日ゆくぞうとけ中駿道信濃善光寺
のち号を本母寺と号て。不動尊の乃場也。作人宗う
ゆうで。むつ梅ものとばつてく。詩と俳と
て。一奥ふと高地也　将軍家ゆく出給ふ。ゆてかよ
ぬ軍屋あうゆ。ぞうこゆうめ和の山茶と。道ふて。ぞ書とう
書とと安ふ。なうさ多ゆくもせの中て。記録書とと
云ふ。むつ一ちのと人の。ゆめて。ゆ。ます。信とちぬ
あづまふ。びとのもびとうちぞ。ぞうれ。ひて生ふとうぞ。
ぬあづまのうてとて。ぞ。ゆくきくもまうぞひつ。道乃第

家乃家ふと。ちと人ちと世ふ。やと。男人ちとめ。ちとと世て
今の目のもんれん地して。涙ふ。逢縁なくと
出家とうあゆく。七月ちうす。ものとうあゆてかくどう
なだちハ　むめとうゆ。あとたの。みへさと

第十一　牛御前

たちて　ふゆ　はうこあう　とあて。孫の男
よの花のちとべ多のこと。ちとう。梅ちうて。ぬ人ちわしな

あうこゞあうこに。ちうて。南の方へ。行て。牛島の牛御前乃
山社ふ。ゆく。山神へ。むつ建長の比。第門ちう。牛男あて
人民とあやは。清盛。のうん。かんゞと人入て。ゆとく。長ぞれとて
行方ちうゞあうち。去ふとうて。あと。牛島と名付。彼牛男
と。一社の神にいまひ。西の氏神とあ。ちうと。牛島第門ちう

あるこゝろ。東海あもとりて。
もゝ流人乃ぞうでゝ。
牛島の牛島。ごまと。
守りくあるうん

第十二　業平天神

そもゝゝ。武南へ行へ。業平天神の社。
堀もゝ。あるゝ。業平村。橋ふあり。
社のそゝ。牛島の古光乃ちゝ。
ありひゝ。
ふのゝくに。
自害の社。
あるゝと。
てゝ。
京や住うりうん。

業平天神の社。
橋といひて。天神の
あめて。
堀よつゝ。
堀の
辛崎。
隅田川へ
扇の芝。
むゝかしの
業平の
住吉
住て。

人ひとをぬきて行くうちに。又は京大納言廷房卿の。
乃第十四卷の書き出しは。業平こゝに住み給ひ。二条の后
と申しきんこう事に。いとゆかしい家をしれり。そこに後髪をとゝのへさん
為に。陸奥國の八十路の山をこえて。小野小町が髑髏の
秋風のぬくうて。ひけてとあれぬく　という歌の
ゆへしつゞ。第十段をとりけくて。夢と形て入くゝ是ぶくゝろれ
目の完とゝ。蔦の生ぬきて。見いだしてゝ第四段の
ひゝ哀れかなとひて。下の句をけく
小野とはいふとも　と仮髑髏
髑髏は。小野小町ぬくうれ。山小町が事さぐう
に。そゞろ。京の小山の。小野とふ山里ふく見ろ。そて
今も石塔ゝ。小町は。奥國とも狂下